

CAN-DOリストの活用を通じた外国語科指導法に関する研究 —小中高接続の視点から—

本研究では、小学校、中学校及び高等学校の新学習指導要領の趣旨を踏まえ、学校段階間の学習到達目標のつながりを考えた外国語科指導法の在り方について検討した。また、各学習段階における学習到達目標を示した CAN-DO リストの活用を通して指導と評価の改善に取り組んだ。その結果、CAN-DO リストを活用することで、生徒の英語学習への意識を高めたり、英語によるコミュニケーション能力を向上させたりする成果が検証された。本稿では、外国語科指導における学校段階間の連携や学びの接続に向けた取組の成果と課題を報告する。

＜検索用キーワード＞ CAN-DO リスト 新学習指導要領 外国語科 小中高接続
学習到達目標 5領域 「授業の手引 高等学校英語」

研究協議会委員

稲沢市立大里東小学校教諭	鈴木 啓太（平成29年度）
東浦町立西部中学校教諭	尾崎 利奈（平成29年度）
県立惟信高等学校教諭	北川 博丈（平成28,29年度）
県立高蔵寺高等学校教諭	堀場 雅博（平成28,29年度）
県立一宮興道高等学校教諭	武田 邦生（平成28年度）
県立常滑高等学校教諭	田中 恵美（平成29年度）
県立豊野高等学校教諭	清水 雅史（平成28,29年度）
県立加茂丘高等学校教諭	小笠原詠子（平成28,29年度）
県立豊丘高等学校教諭	白井 敬子（平成28年度）
県立豊橋商業高等学校教諭	木下 裕美（平成28,29年度）
総合教育センター研究指導主事（現県立旭丘高等学校教頭）	関 友彦（平成28年度）
総合教育センター研究指導主事	田口 英樹（平成29年度）
総合教育センター研究指導主事	広瀬八重子（平成28,29年度主務者）

1 はじめに

小学校、中学校の新学習指導要領解説（文部科学省、平成29年6月）において、小学校中学年では、年間35時間の外国語活動で「聞くこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」を、さらに高学年では、年間70時間の外国語科で「読むこと」「書くこと」も扱うことが示された。また、中学校外国語科では、「生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする」とされ、高等学校の外国語科指導との接続が求められている。小・中学校の外国語科の目標は、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの資質・能力を明確にした上で、各学校段階の学びを接続させるとともに、「外国語を使って何ができるようになるか」を明確にするという観点から改善・充実が図られている。また、小・中・高等学校で一貫した目標を実現するため、国際的な基準などを参考に、「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」「書くこと」の五つの領域で目標が定められ、

小学校3年生の外国語活動から、中学校の外国語科まで領域ごとの目標が一覧で示されている。一方、各学校が設定すべき学習到達目標について、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（中央教育審議会，平成28年12月）では、次のように記されている。

- 各学校においては、国が外国語の学習指導要領に定める領域別の目標を踏まえ、更に具体的に各校の学習到達目標を設定する。その際、個別の知識がどれだけ身に付くかに主眼を置くのではなく、「知識・技能」を外国語による実際のコミュニケーションにおいて活用し、外国語で情報や自分の考えなどを表現し伝え合うことで、「思考力・判断力・表現力等」について外国語教育の資質・能力の育成が図られるよう、学習内容等を設定することが求められる。
- 各学校の学習到達目標は、学習指導要領上の目標等に基づいて児童生徒が身に付けることが期待される資質・能力に関する目標である。児童生徒の学習状況や地域の実態等を踏まえた上で、卒業時の学習到達目標を、「～することができる」という形で設定し、指導の改善などに活用することが想定されている。

各学校において、児童生徒の卒業までを見通し、いつ、どの領域のどの目標を、どのような言語活動を通して達成するかを考え、学習到達目標に基づく年間学習指導計画及び単元計画を作成することが求められる。外国語の授業を通じて「どのような力を身に付けるか」ということを、児童生徒や保護者とも共有し、目標の到達度を適切に把握するための評価の改善も必要となる。

現在、中学校・高等学校に対して、「英語を使って何ができるようになるか」を『CAN-DO リスト』の形式での学習到達目標」として具体的に設定・公表し、達成状況を把握することが求められており、その実施状況は、次のとおりである（表1）。

【表1 平成28年度英語教育実施状況調査（文部科学省，平成28年12月）から抜粋】

評価項目	中学校（全国 / 愛知県注1）	高等学校（全国 / 愛知県）
「CAN-DO リスト」形式の学習到達目標を設定している学校（学科）	75.2 % / 37.8 %	88.1 % / 98.5 %
「CAN-DO リスト」形式の学習到達目標を公表している学校（学科）	12.0 % / 4.9 %	28.4 % / 10.9 %
「CAN-DO リスト」形式の学習到達目標の達成状況を把握している学校（学科）	34.2 % / 16.8 %	41.6 % / 40.3 %

注1）中学校（愛知県）は、名古屋市を除く

愛知県では、平成28年度までに全ての県立高等学校で、「CAN-DO リスト」形式の学習到達目標を設定しているが、同形式の学習到達目標の公表（「学校だより」で紹介したり、学校のホームページに掲載したりなどすることで、生徒、保護者及び地域住民に広く伝えていること）や、同形式の学習到達目標の達成状況の把握（テスト等の実施により、設定した学習到達目標の達成状況を客観的に把握している状態）の二つの項目は、全国平均を下回る結果となっている。

愛知県教育委員会が作成した、「愛知県英語教育改善プラン」（平成28年）では、表1の全ての評価項目における平成29年度の目標指針を、中学校・高等学校ともに100%とし、「CAN-DO リスト」形式での学習到達目標の設定の促進による、指導と評価の改善を求めている。

本研究では、こうした状況を踏まえ、CAN-DO リストの活用を通じた英語の指導と評価の改善に取り組み、その効果を検証することとした。

2 研究の目的

当センターの教育研究調査事業の一つである「教科指導の充実に関する研究（英語）」では、平成

28年度まで、高等学校における英語教育の当面する課題について調査研究を進め、生徒の英語によるコミュニケーション能力の育成をねらいとする指導法及び評価法の開発に取り組んできた。その成果を踏まえ、本年度は、小・中・高等学校の研究協力委員による研究を行い、英語教育における学校段階間の連携や学びの接続への指針について広く発信し、各学校段階における指導と評価の改善に資する。なお、当センターにおける過去10年の英語教育に関する研究主題は表2のとおりである。

【表2 過去10年の英語教育に関する研究主題（愛知県総合教育センター『研究紀要』）】

年度	研究主題	研究紀要
平成20・21年度	小中連携による外国語活動の在り方に関する研究	第98・99集
平成24年度	コミュニケーション能力を育成する外国語科指導の在り方に関する研究 －単元構想の工夫と言語活動の充実－	第102集
平成26年度	外国語（英語）科における言語活動中心の単元構想と評価の在り方に関する研究	第104集

3 研究の方法

(1) 小・中・高等学校の外国語科指導における連携・接続についての実態把握

研究協力委員が各地区（稲沢市，知多地区，豊田市藤岡地区，豊橋市）の小中高連携協議会等で収集した学校段階間の連携・接続に関する情報について協議を行い、課題解決の方策を探る。

中学校・高等学校間における外国語科指導の接続に関しては、「高等学校新入学生徒の学力に関する研究」（愛知県総合教育センター）の調査結果の経年比較（p.4 表3）や、同研究で提案された指導例を参考に指導上の課題と解決法について検討し、授業実践に生かす。

(2) 学校段階間の学びの接続を目指した指導の実践（小・中・高等学校）及び研究協議

各研究協力委員の授業実践及び研究協議を通して、新学習指導要領も見据え、学校段階間での学習到達目標や学習内容のつながりを考えた指導の在り方について検討し、外国語科指導における連携や学びの接続への指針を示す。また、所員による授業参観を行い、その内容を研究協議に生かす。

(3) CAN-DOリストの活用を通じた指導と評価の実践（高等学校）及び研究協議

各学習段階における学習到達目標を示した、CAN-DOリストの活用を通じた指導と評価に関する実践について協議を行い、生徒の英語学習への意識の変化や、英語によるコミュニケーション能力の変容を検証する。また、「CAN-DOリストの活用に関するアンケート」（p.5 資料1）の結果や、平成28年度の「教科指導の充実に関する研究（英語）」で作成した研修用教材「授業の手引 高等学校英語」の実践例を踏まえ、各校におけるCAN-DOリストの効果的な活用法について検討を重ね、指導と評価における課題と解決法を探るための一助とする。

4 研究の内容

(1) 小・中・高等学校の外国語科指導における連携・接続について

ア 先進的な取組と共通する課題について

研究協力委員が収集した情報に基づき、各地区における先進的な取組と共通する課題等について協議を行い、各校での実践を通して、課題解決に向けた指針を提案することとした。

【先進的な取組】

- ・ 異校種間での授業交流や情報交換を行っている（知多地区，豊田市藤岡地区，豊橋市 他）。
- ・ 小中高の連携事業として、中学生対象のイングリッシュ・キャンプの運営に高校生が協力

したり、小学生対象の出前授業で、高校生が講師を務めたりしている（知多地区）。

- ・ 中学生対象のイングリッシュ・キャンプ（市主催）に、高校生がボランティアとして参加している（豊橋市）。
- ・ 英語科教員を対象に「英語教育に関するアンケート（意識調査）」を行っている（豊橋市）。
- ・ 高等学校第1学年のCAN-DOリストの能力記述文を見直す際に、地域の中学校の指導内容や学習到達目標についての情報、中学校の教員からの助言を参考にしている（知多地区）。
- ・ 全ての中学校がCAN-DOリストを作成し、活用を目指している（豊橋市）。
- ・ 地域の中学校と高等学校が合同でCAN-DOリストを作成し、活用を目指している（豊田市藤岡地区）。

【共通する課題】

- ・ 小学校の担任とALTとのティーム・ティーチングの方法や、外国語（英語）の免許をもたない教員による外国語指導法
- ・ 小学校外国語科における評価方法
- ・ 小・中学校の外国語指導の接続や学校種間の観点別評価の接続
- ・ 高等学校における、CAN-DOリストの活用や、パフォーマンス評価の方法
- イ 外国語科指導における中高連携・接続の課題について

当センターでは、愛知県高等学校英語教育研究会と共同で、参加を希望する愛知県内の国・公・私立高等学校の新入学生徒を対象に、高等学校新入学生徒学力調査を実施し、その調査結果及び分析内容を、「愛知県総合教育センター研究紀要別冊」という報告書にまとめている。そこで、この報告書を外国語科指導における中学校・高等学校間の連携・接続に向けた参考資料として用いた。

この報告書に示された「抽出答案（各校受検者の10%）による設問別正答率の推移」は表3のとおりである。年度により出題内容や難易度が異なるため、単純な比較は難しいが、複数の年度で、語彙や表現の知識を活用すること（設問【2】【4】【6】）を苦手とする傾向が、高等学校入学時に見られることが指摘されてきた。

【表3 抽出答案（各校受検者の10%）による設問別正答率の推移】

年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度
抽出人数（人）	3, 252	3, 158	3, 284	3, 227	3, 204	3, 265	3, 252	3, 207	3, 177
全設問（%）	56.6	60.8	61.7	61.1	57.0	51.2	65.5	59.9	61.9
【1】発音・文強勢	53.3	48.5	65.4	45.2	66.6	46.9	59.8	64.3	64.5
【2】語彙	53.0	54.0	46.4	50.6	41.2	47.9	49.6	35.5	64.5
【3】文法・語法	55.5	67.2	68.8	79.0	67.0	55.7	63.9	56.0	74.3
【4】文法・表現	42.6	66.8	47.9	53.3	40.3	42.9	71.4	59.8	70.1
【5】口語表現	86.4	76.7	70.7	74.4	73.5	45.8	83.9	65.7	55.2
【6】整序・作文	42.8	56.3	65.7	55.6	55.2	55.2	60.9	66.3	40.0
【7】長文読解	54.8	62.3	61.8	63.7	52.7	51.2	60.5	63.3	61.6
【8】聞き取り	72.1	50.6	60.0	70.7	75.1	59.1	75.5	60.4	72.5

また、報告書では、中学校・高等学校間の連携・接続に向けた具体的な指導例として、英語によるコミュニケーションの場面や活動を行う目的を明確にし、語彙や表現を適切に用いながら、ペアやグループでまとまった英文や会話の内容を伝え合わせるような活動例が挙げられ、活動の評価法についても提案されている。この具体的な指導例を参考に、本研究では、小・中・高等学校のそれぞれの学習段階において、4技能の中の「書くこと」をどのように扱い、既習の知識を活用させながら、学校

段階間の円滑な学びの接続につなげるかといった点を意識して、実践を進めることとした。

(2) 学校段階間の学びの接続を目指した指導の実践及び効果的な指導法について

小・中・高等学校の研究協力委員による、学校段階間の学びの接続を目指した指導の実践の概要は次のとおりである。それぞれの手だての効果を検証するために、授業中の観察、ワークシートへの記入状況、振り返りの内容やアンケート結果などを基に、児童生徒の変容を分析することとした。

ア 稲沢市立大里東小学校「小学校外国語活動から外国語科に向けた実践」【実践報告1参照】

新学習指導要領を踏まえ、小学校中学年の外国語活動及び高学年の外国語科の授業実施に向けた、校内体制づくりと授業実践に取り組んだ。授業の「めあて」の提示と振り返りの工夫や、担任とALTの指導上の役割を明確にする効果を、アンケート結果や授業分析により検証した。

「聞くこと」「話すこと」を中心とした実践により、授業で学んだことが身に付いていると児童に実感させることができ、外国語活動への意欲が高まっていることを確認できた。今後は、小学校高学年に求められる、「書くこと」を扱う実践や評価を充実させることが課題である。

イ 東浦町立西部中学校「外国語科指導における小・中学校の接続に向けた実践」

【実践報告2参照】

小学校外国語活動と中学校外国語科の接続を目指した授業実践を行った。外国語活動で音声を中心に慣れ親しんだ表現や知識を、外国語科で主に書く活動を通して定着・活用させる工夫とその効果を、アンケート結果や授業分析により検証した。

デジタル教材を用いて小学校の学習内容の復習をし、文の構造や単語の意味についての理解を深めさせることが、知識や表現を積極的に活用させる上で有効であることを確認できた。今後は、「書くこと」への苦手意識を克服させるための手だてを更に工夫することが課題である。

ウ 県立加茂丘高等学校「外国語科指導における中学校・高等学校の接続に向けた実践」

【実践報告5参照】

平成26、27年度文部科学省「課題解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究」に取り組み、その後「主体的・対話的で深い学び」による思考力・判断力・表現力等の育成に向けて、研究を継続している。平成29年度は、中学校・高等学校間の学びの接続を目指し、指導と評価の改善に組織的に取り組んだ。

(3) CAN-DOリストの活用を通じた実践及び効果的な指導・評価法について

ア 「CAN-DOリストの活用に関するアンケート」の実施

高等学校英語5年目及び10年目経験者研修受講者（64名）を対象に行った「CAN-DOリストの活用に関するアンケート」（資料1）の結果を参考に、CAN-DOリストの活用に関する課題と解決法について協議し、実践に生かすこととした。

【資料1 CAN-DOリストの活用に関するアンケート】（愛知県総合教育センター、平成29年8月）

質問1 校内で作成し、平成28年5月までに県教育委員会に提出したCAN-DOリストは、どのような場面で活用されていますか（複数回答可）

① 年間や学期の指導計画を立てる際	24名 (37.5%)
② 年間や学期の評価（パフォーマンステストを含む）の計画を立てる際	13名 (20.3%)
③ 単元や各授業の指導計画を立てる際	10名 (15.6%)
④ 定期考査を作成する際	2名 (3.1%)
⑤ 授業で使用するワークシートを作成する際	2名 (3.1%)

⑥ 授業を実施する際	1名 (1.6%)		
⑦ パフォーマンステストを実施し、評価する際	11名 (17.2%)		
⑧ 生徒が学習について振り返る際	3名 (4.7%)		
⑨ 教員が学習指導や評価方法について振り返る際	10名 (15.6%)		
⑩ 生徒や保護者に学習到達目標を示す際	3名 (4.7%)		
⑪ 上記以外の場面 【 新転任の教員と目標を共有するため 】	1名 (1.6%)		
⑫ ほとんど（または全く）活用されていない	32名 (50.0%)		
質問2 校内での CAN-DO リストの活用に関して、現在どのようなことが課題であると思いますか （記述） ※ 多数回答の内容を掲載			
・ 実際に使う機会が少ない	17名 (26.6%)		
・ 教員間や学年間で目標が共有されておらず、共通理解が図れていない	16名 (25.0%)		
・ 更新・修正されていない	10名 (15.6%)		
質問3 校内の CAN-DO リストを活用するために、リストの内容の見直しや修正は必要であると思 いますか			
① 必要	29名 (45.3%)	② どちらかといえば必要	18名 (28.1%)
③ どちらかといえば必要ない	12名 (18.8%)	④ 必要ない	5名 (7.8%)
理由（記述） ※ 多数回答の内容を掲載			
・ 教科書の内容の変更や生徒の実態の変化に対応するために、必要である	24名 (37.5%)		
・ 英語科内で共通理解を図ったり目標の再確認をしたりするために必要である	8名 (12.5%)		
・ 修正よりもまずは活用をするべきであり、必要ない	7名 (10.9%)		
質問4 校内で CAN-DO リストの活用を進めるために、どのような工夫や改善が必要であると思 いますか（記述） ※ 多数回答の内容を掲載			
・ 教科会（4月、年度末等）で、目標についての共通理解を図ることが必要である	17名 (26.6%)		
・ 年間学習指導計画と関連させることが必要である	3名 (4.7%)		
・ 他校の作成・活用例を参考にするなどの、情報共有が必要である	3名 (4.7%)		

アンケートの質問1において、CAN-DO リストの活用場面について尋ねた。4割程度が「年間や学期の指導計画を立てる際」と回答したが、全体の半数が「ほとんど（または全く）活用されていない」と回答した。校内で CAN-DO リストを作成したことが、指導や評価の改善に生かされているとは言えないと思われる。このアンケート結果を、CAN-DO リストの内容を日頃の指導や評価に生かし、生徒も教員も学習到達目標の達成度を把握し、校内の英語科内のみならず、保護者や他教科・異校種の教員とも目標を共有するための方策について検討するための参考資料とした。

イ 各校における授業実践の概要

(ア) 県立豊野高等学校 「CAN-DO リストの活用を通じた指導と評価の実践」

【実践報告3参照】

「コミュニケーション英語Ⅰ」の指導と評価において、CAN-DO リストを単元や授業の目標と関連させ、言語活動やパフォーマンステストのねらいと学習到達目標とのつながりを生徒に意識させる工夫をした。生徒の英語学習やコミュニケーション活動に対する意欲の変化を、アンケート結果の分析により検証した。

生徒の英語の学びに対する達成感や充実感が、「話すこと」「書くこと」を中心とした活動のみ

ならず、グループ・ワークなどを通して「理解する」プロセスでも高まることが確認できた。今後は、4技能（5領域）をバランスよく育成するために、指導と評価の一体化を更に進めることが課題である。

(イ) 県立惟信高等学校 「CAN-DO リストの活用を通じた指導と評価の実践」

【実践報告4参照】

平成25～27年度に、文部科学省の「多様な学習成果の評価手法に関する調査研究」に取り組んだ成果を生かし、現在もパフォーマンス評価のモデルとなる取組を英語科全体で継続している。

「英語表現I」の指導と評価において、CAN-DO リストを基に、単元のCAN-DOを作成し、授業用ワークシート、パフォーマンス評価用ルーブリック及び振り返りシートを用いて、生徒に学習到達目標とその到達度を把握させる工夫をした。生徒の英語学習やコミュニケーション活動に対する意識の変化を、振り返りの記述内容やアンケート結果の分析により検証した。

(ウ) 県立加茂丘高等学校「学校段階間の連携に向けたCAN-DO リストの作成及び活用例」

【実践報告5参照】

豊田市立藤岡中学校、豊田市立藤岡南中学校との授業交流や連携事業を通じた、学校段階間の学習到達目標のつながりを示したCAN-DO リストの作成及び活用に取り組んだ。新学習指導要領で示された5領域の目標を参考に、つながりをもたせるべき項目例を具体的に設定し、小・中・高等学校における学びの接続を目指したCAN-DO リストの例を作成した。

本実践を通して、同じ地域の異なる学校種間で育てたい生徒像を共有し、外国語科指導における連携を密にすることが可能となった。今後は、その積極的な活用により、学校段階間の指導の接続の効果や課題の検証を行い、小・中・高等学校の外国語科指導の接続が図られることを期待したい。

5 研究の成果と今後の課題

本研究を通して、学習到達目標を明確にし、学校段階間の学びの接続の視点から指導や評価の工夫をすることは、児童生徒の英語学習への意欲を高めたり、英語によるコミュニケーション能力を向上させたりする効果があることが明らかとなった。また、研究協議会を重ねたことにより、学校段階間で情報を共有し、新学習指導要領を見据えた議論が深まったことは大きな成果であった。以下に、本研究の成果と課題をまとめ、各校の今後の取組への指針を示す。

(1) 小・中・高等学校の外国語科指導における連携・接続について

ア 指導内容の接続

【実践報告1】では、小学校における外国語科指導を日本人教師が中心となり行うための工夫とその効果が示された。学習到達目標を提示したり、振り返りを工夫したりすることは、小学校外国語活動及び外国語科の指導において有効な手だてであった。また、【実践報告3】でも、学習到達目標を提示したり、振り返りを工夫したりする手だての有効性が示された。このことから、こうした手だてを中学校や高等学校の外国語科指導に応用できるとよい。【実践報告2】の実践では、小学校外国語活動の単元・言語材料の復習や活用を取り入れ、小・中学校の指導の接続の効果を検証した。デジタル教材を用いた復習の効果を生かし、生徒が苦手意識をもちやすい「書くこと」への動機付けや、中学校での英語学習への積極的な取組にもつなげたい。中学校で行われるインタビュー結果をグループで話し合い、発表させるという活動は、【実践報告3】の高等学校におけるグループでの話し合い・発表と評価の活動につながっている。【実践報告4】の授業実践で、Small Talk や Show & Tell の活動が取り入れられているが、これは小・中・高等学校全てに共通する言語活

動の例である。【実践報告5】の授業実践の、帯活動（コミュニケーション活動）や、グループ・プレゼンテーションも、中学校と高等学校の間の接続を可能にさせる指導例である。

イ 今後の課題

今後は、小学校外国語科における評価法、各学校段階での観点別評価やパフォーマンス評価の方法を中心に、外国語科評価法における小・中・高等学校の接続について研究していく必要がある。また、各学校で使用されている教材・教科書の題材、言語材料及び言語活動を、学校段階間の指導の接続に有効活用することや、地域の学校間の連携を更に密にすることが求められる。

(2) CAN-DOリストの活用を通じた指導と評価の在り方について

ア 目標の共有と具現化

【実践報告3】において、CAN-DOリストを生徒に配付し、単元の指導目標や評価のねらいと学習到達目標の関連性を意識させることで、どの技能をどのように伸ばすために学習を行うかが明確になり、学習意欲を向上させる効果があることが確認できた。【実践報告4】において、CAN-DOリストの活用を通じた指導と評価を実施し、生徒に学習への見通しをもたせ、振り返りをさせることで、自律した学習者の育成が可能になることが確認できた。【実践報告5】では、学習到達目標や育てたい生徒像を、地域の中学校と共有するために、CAN-DOリストの活用を図った。5領域の項目を細分化し、小・中・高等学校の学習到達目標のつながりを具体的に示したモデルを作成した。

CAN-DOリストを基に、シラバスやワークシートなどの生徒や保護者の目に触れるものに、単元の指導計画や単元のCAN-DOなどを反映させることは、学習到達目標について共通理解を図るための手助けとなる。また、【実践報告4】や【実践報告5】で提案されたように、CAN-DOリストの活用や共有を通して、校内及び校外における教員同士の関係性を深めることや、更に実用性の高いCAN-DOリストへと修正することも可能となる。

イ 評価方法の改善

CAN-DOリストを基に5領域をバランスよく評価するための方法を検討し、定期考査を作成したり、パフォーマンステストを実施したりすれば、より妥当性や信頼性の高い評価が可能となる。評価後に、学習到達目標の達成度を生徒や保護者に伝えることもできる。これについては、【実践報告5】において、能力記述文の達成に向けた段階的な指導計画と効果測定が扱われている。さらに、児童生徒の学習到達状況に応じた指導と評価を可能にさせる、CAN-DOリストの在り方についても報告されている。また、【実践報告3】において、ルーブリックや振り返りにより、評価やフィードバックを工夫するだけでなく、学習到達目標と評価の関係を、生徒に分かりやすく伝えるために、定期考査の出題内容と指導目標とのつながりを再考すべきであるという課題が出された。

ウ 学習到達目標の見直し

年間の指導の実施状況や評価の結果、生徒・教員アンケートなどに基づき、学習到達目標の達成状況を把握し、次年度に向けて修正を行うことが必要である。【実践報告4】において、CAN-DOリストを用いた指導と評価の実践とその軌道修正を繰り返すことによる成果と課題を、外国語科内で共有し、CAN-DOリストの修正を図るという課題が出された。さらに、英語の4技能を測るための新大学入試の動向も見据えて、各民間試験のCEFRをベースとしたとCAN-DOリストと、校内の学習到達目標のつながりを考えることも今後必要となる。【実践報告3 p.9 資料B】【実践報告4 p.11～ p.13 資料8】に掲載した、高等学校CAN-DOリストの例において、特に次の資料2に示した点について、各校の学習到達目標の見直しの参考とされたい。

【資料2 CAN-DOリストに関して参考とすべき点】

- ・卒業時の目標や、育てたい生徒像が明示されている
- ・4技能（5領域）の育成に向けて、学習段階（学年）ごとの目標が適切に設定されている
- ・能力記述文に、具体的な語数・程度など評価可能な内容が含まれている
- ・コミュニケーション活動や言語活動を通して、身に付けることが期待される能力が示されている
- ・ディスカッションやディベートなどの活動目標と、能力記述文の内容に関連性がある
- ・外部指標との対応や目標指標が示されている（例：〇〇検定〇〇級合格〇〇〇名以上）
- ・学校のホームページに掲載するなど、校外に広く発信できる記述内容になっている

また、中学校においては、「『グローバル化に対応した新たな英語教育の在り方』リーフレット 実践事例編：中学校外国語（英語）科 愛知県教育委員会版 CAN-DO リスト」（愛知県義務教育問題研究協議会 平成29年3月）も参考に、CAN-DO リストの作成・活用を図られたい。

6 おわりに

「CAN-DO リストの活用を通じた外国語科指導法」をテーマに掲げ、小中高接続の視点から実践研究を進めたことにより、外国語指導における学校段階間の接続や、各学校段階における指導と評価の改善に向けた方策の一端を示すことができたと思う。

平成29年度は、小・中・高等学校の研究協力委員で実践研究を行う初年度であったため、実践内容や研究のまとめに関して、多くの課題が残されている。今後も、外国語科指導において、小・中・高等学校で一貫した目標を実現できるように、各地区や各学校段階における、指導の接続や学びの連続性につながる学習活動がますます積み上げられ、充実していくことを期待する。

参考資料・参考文献等

- 文部科学省『小学校，中学校 学習指導要領』平成29年3月公示
- 文部科学省（2017）『小学校，中学校 学習指導要領解説 外国語編』
- 文部科学省（2010）『高等学校 学習指導要領解説 外国語編・英語編』
- 文部科学省（2016）『平成28年度英語教育実施状況調査』
- 文部科学省（2016）『幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』
- 文部科学省（2013）『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標設定のための手引き』
- 愛知県教育委員会（2016）『愛知県英語教育改善プラン』
- 愛知県義務教育問題研究協議会（2017）
『「グローバル化に対応した新たな英語教育の在り方」リーフレット』
- 愛知県総合教育センター『平成29年度 高等学校新入学生徒の学力に関する研究（英語）』
- 愛知県総合教育センター『研究紀要』第98，99，102，104集
- 愛知県総合教育センター（2017）
『指導と評価の充実に向けて ～学習評価の工夫改善を意識した学習指導のポイント～』
- 愛知県総合教育センター（2017）『授業の手引 高等学校英語』
- 『英語4技能評価の理論と実践 ―CAN-DO・観点別評価から技能統合的活動の評価まで―』
望月昭彦，印南洋，小泉利恵，深澤真 著 大修館書店 2015

- 『CAN-DO リスト作成・活用 英語到達度指標 CEFR-J ガイドブック』 投野 由紀夫 編
大修館書店 2013
- 『ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) から学ぶ英語教育』 キース・モロウ 編 研究社 2013
- 『小学校英語教科化への対応と実践プラン』 吉田 研作 編 教育開発研究所 2017
- 『小学校英語から中学校英語への架け橋 文字教育を取り入れた指導法モデルと教材モデルの開
発研究』 小野尚美 他 朝日出版社 2017